

(様式6-2)

研究成果概要

所属学校名 鈴鹿市立稲生小学校

職・名前 教諭 高橋 倫子

- 1 事業の名称 情報教育内地留学
- 2 留学先の名称 三重大学教育学部附属教育実践総合センター
- 3 研究主題 津波被害が懸念される沿岸地域における近隣小学校間の連携
を目指すICTを活用した防災学習プログラムの開発と実践
—防災意識の向上を目指した小学生による「まち歩き防災スライドショー」制作—

4 研究成果の概要

三重県では、南海トラフ地震発生が危惧されており、沿岸地域における津波対応の防災教育は重点課題の一つとなっている。これを踏まえて、各学校では地域性を考慮した防災対策、単一地域内での他校種連携が進められようになってきているが、地域の垣根を越えた近隣の小学校同士の連携はまだである。

そこで本研究では、南海トラフ地震発生による甚大な津波被害が懸念される地域において近隣の小学校との学びを共有するためにICTを活用した防災学習プログラムの開発を行った。本プログラムは次のような3点の方針で開発をした。

- ①総合的な防災学習を目指した学習プログラム
- ②近隣小学校との協働で進める学習プログラム
- ③防災学習にICTを活用する学習プログラム

本プログラムは、3年間の中期的な計画の中で「学校間の相互理解」「学校間の協同」「ネットワーク拡充」といった3つの段階から構成されているのが特徴である。このうち、1年次は、学校間の相互理解を図る「まち歩き防災スライドショー」の制作・交流を行った。

スライドショーを制作するにあたり、児童はまちたんけんを行い、地域取材を進めた。写真撮影から音声の録音再生、画像編集までの一連の活動を1台のタブレット端末で行うことができたことは、児童の学習活動を円滑に進めるだけでなく、活動時の児童のモチベーションを向上させ、言語活動の活性化にもつながった。

歩く、書くなどの昔ながらの方法とICTの両方のよいところをブレンドしたことによって、「もう一度やってみたい」という動機づけと学習理解の定着との両方の効果を得ることができた。このように、紙とタブレットの両方の役割を駆使して、関連付ける方が学習には効果的であることが分かった。

スライドの制作活動を通して、児童は防災を身近な問題として捉えることができ、防災意識が向上した。児童が伝える情報は受け手にとっても分かりやすく、学校間で作品交流を行うことによって相手理解が促進されることが示唆された。

また、授業実践は、防災をテーマにしながらも、他教科領域との連動も可能であり、有効的な学習効果を生み出すことができることも明らかとなった。

今後の課題として、複数回の学校間交流（直接・遠隔）を可能にするICT活用の在り方を検討すること、支援体制の拡充が必要である。